2021年
12月

マナ通信

今月のマナ通信は、
◎10月の聖書日課（Ⅱペテロの手紙、ネヘミヤ記、
Ⅰ・Ⅱ・Ⅲヨハネの手紙、ユダの手紙、エステル記）
◎土・日曜日の学び（イスラエル王国）の感想です。

神は「聖く」、「正しく」、「愛ある」方です。これに対し人間は自分勝手で、自分中心です。他人と見比べ喜んだり、悲しんだり、嫉妬したりします。それでも人間は良心が備わっているので、恥ずかしい行動は避け人間らしく振る舞います。しかし、人間は例外なしにみんな罪人です。

原罪は、いくつもの罪を発生させます。神はその聖さゆえに罪を拒絶し、その正しさゆえに罪を罰します。神は人間を神に似たものとして造られましたがアダムの不従順により、罪に陥り神との交わりが途絶えました。そこで愛ある神は人間を憐れみ救いの手を差し延べて下さいました。

一人の御子イエスを人間の形をとらせこの世に送り出した下さったのです。それはとりもなおさず我々の罪のため十字架に掛かって罪を贖うためでした。

イエス様は我々の罪一切をその身に負い人間としてもだえ苦しみながら死なれました。その時罪ある古い我々もイエス様と一緒に十字架上で死にました。現代、過去、未来の罪ある古い人は皆死んだのです。しかし、神であるイエス様は３日後によみがえりました。神は死に対して影響力を持つサタンに勝ったのです。死から解放されいのちにあるものとなったのです。イエス様と一緒に死んだ我々は新しいいのちとをいただき、イエス様と一緒に復活したのです。新生しました。神の子とされ永遠のいのちをいただきました。

しかし、ここには条件があります。神は愛あるため究極の救いをして下さいました。この神の贖いの業を信じるものを神は「義」としてくださったのです。この神からのプレゼントは我々の目の前に置かれただけなのです。そのプレゼントを信仰によって掴み取らなければなりません。 今、過去を振りかってみると、日常生活に於いて、仕事の上に置いて多くの罪を犯して来ました。頭をよぎる思い出したくない過去の記憶は自分で反省してもどうする事も出来ません。しかし、神様にはできるのです。十字架で我々の罪の贖いを信じたとき、神は「もう心配しなくてもいいよ、安心しなさい。」と額に義と認めた合格の印を押して下さるのです。古い自分は死んで、新しく生まれ変わりました。

神は苦境から救って下さいます。形として事故に於いて現れます。私は間一髪でいのちを取り留めました。大けがから救われました。ここにまさに神の存在を知ります。神の愛を感じます。

「神が私たちに御霊を与えてくださったことによって、私たちが神のうちにとどまり、神も私たちのうちにとどまっておられることが分かります。私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、その証しをしています。だれでも、イエスが神の御子であると告白するなら、神はその人のうちにとどまり、その人も神のうちにとどまっています。私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっておられます。」

（Ⅰヨハネ4:13-16）

日々の生活で神は共にいて下さり聖霊が教えてくださいます。私はクリスチャンが好きです。なぜなら、クリスチャンは誰でも隣人を愛する心を持っているからです。

（畑中伸之）

神よ助けて下さい。二回信仰を閉ざしてしまいました。それゆえに、心の中は主イエス様もなく、空っぽです。私は聖霊様に願いました。私にどうか再び聖霊様が心の中に住んで下さいますように。マナを読んでいて私の心を揺り動かすものがありました。

「だからこそ、あなたがたはあらゆる熱意を傾けて、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。」

（Ⅱペテロ1:5-7）

この聖句を知り私は信仰の尊さ、主の御心が心の中でうごめいているのを感じました。主よ、あなたへの交わりを休み、あなたの心を知ることが出来なかった私です。これらを備えていない人は心が見えていないのです。主よ、どうかお赦し下さい。

集会を与えられている者は幸いです。休むことなく信仰に励みたいと思います。主よ、あなたをあがめ、尊び絶え間なくこころが揺らぐことのないよう私を治めて下さい。

主に、感謝します。（畑中千恵子）

主を喜ぶことは、あなたの力だからだ。……」（ネヘミヤ8:9～18）

〈みことばを味わおう〉から教えられたことです。

人々は律法に書かれていることを理解した時、泣き出しました。……人々が律法によって心が刺されたからだと想像できます。……律法は、神様がイスラエルの人々と結ばれた契約です。契約には祝福と呪いが伴いました。

申命記11章26節「主の祝福を選ぶのか呪いを選ぶか、今はっきり決めなさい。27　私が与える主の戒めに従うなら祝福されます。28しかしそれを拒否して、外国の神々を拝んだりするならのろわれます。」

しかし今、こうして再び、イスラエルは神様の律法のことばを聴き、それに従って歩み始めたのです。呪いを選んだイスラエルを神様はお見捨てになりませんでした。……この神様が、私たちに一番に求めておられることは、神様の前で喜ぶことです。

神様に造られたことを、神様の造られた世界で生きることを、喜ぶことです。……聖書に教えられていることを理解した時、人々は喜びました。そしてその喜びは力になりました。

神様は私たちに試練も苦しみも何もない人生を約束しておられない、むしろ暗闇の道を辿ることも多々あります。そして失敗や苦しみから学び励まされることから、喜び、賛美が生まれてくる経験をさせてくださることを心から感謝いたします。（福島三弥子）

ネヘミヤが城壁を建てるに当たり、敵から脅迫、妨害が有りました。

見える現実に心が怖(おじ)気(け)づき主への信頼から離れて、右往左往せず、主に信頼し続けたネヘミヤの信仰を肝に刻んでおきたい。私自身は臆病で不信仰で、情けない者です。

こんな時は、落ち着いて過去にいかに多くの恵みを頂いていたか、思い起こすことにしています。失敗と見えたことも、今になって見ると信仰の成長に不可欠で、恵みであったことに気づくこともあります。主のなさることに、無駄なことはありません。この確信を持ち続け、迷ったときはいつも主に立ち返りたいと思う。

Ⅰサムエル16章18節でエッサイの末息子・ダビデのことを物事の判断ができ云々に、心が動かされました。正しい判断ができることは、全人格が関わって、感性と共にそれまでの生き方が問われると思います。

周囲の人たちにここまで信頼されていたダビデは、主を畏(おそ)れ、主に愛されて成長してきたのですね。生き方で主の恵みを顕(あらわ)せるようになりたいものです。（広瀬裕子）

万事を益としてくださる、とは、何度も聞いてきたことですが、それを、ロイドジョンズ兄は、広

く深くとらえて書いていてくれてます。
　多くのクリスチャンが経験してることでしょうが、何事もなく、穏やかな日々が続く時に、突然とんでもないことが起こると、それまでの信仰が何だったかと怪しむような事態に陥り、ただただ主に心を向けて祈るしかなくなります。それが「覚醒される」と書かれていることなのでしょう。
　そうなって、主に心を向けて祈りつつ、事に当たりながら、なんとか困難な山を越えたと思えるころに、その状況を経験しなければ見えなかったであろうことを見ることができたとわかってきます。「苦しみにあったことは幸いでした、私はそれであなたのおきてを学びました。」（詩篇119:71）なのでしょう。
　また、困難な状態になってみて、今まで頼りにしていたものが、ガラガラと崩れ去ることも知ります。そうして、あらためて、岩である主の存在の大きさが増してゆくような気がしますし、以前よりも主に信頼するようになると思います。
　ロイドジョンズ兄はここで終わらずに、さらに、将来の私たちに用意されている栄化（究極的な目的）へと目を向けさせています。そこまで見ているのです。それを知ることができるのも、困難の中に置かれたからだ、つまり，困難が益とされたゆえだと言います。
　クリスチャンとはなんと恵みの中にあることでしょうか。今の困難も益とされ、将来までも約束されているのですから。
　それにつけても思うのですが、今の時に主を信じていない人、その人たちが今だけでなく、将来までも失ってしまうのを知ると、何とか、今の時代に主を信じてほしい、と願わずにはおれません。
（高橋美枝）

愛する者たち。私があなたがたに書いているのは、新しい命令ではなく、あなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。」
（Ⅰヨハネ2:7）
　ヨハネがこの世での生涯の終わりに兄弟姉妹に伝えたかったのは、みことばに聞き、従うことでした。ヨハネの時代から現代まで、世界は様々に変化し、いろいろな出来事を経験して共有してきました。そしてこれからも世界は同じように、または更にスピードを上げて変化していくように思われます。
　しかし私たちは変わらず、聖書のみことばから学び続けます。これは神様から私たちに与えられている素晴らしい特権です。
　「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも同じです。」（ヘブル13:8）（永井亮子）

私たちは自分たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっておられます。」（Ⅰヨハネ4:16）
　私たちが神様から試練を与えられる時、私たちを愛するが故に、神様が敢えて試練を与えてくださるのだと思います。
　神様から離れ、不信仰になっている時に、軌道修正をしてくださるのです。愛のうちにとどまり、神のうちにとどまりたいと切に願います。神も私のうちにとどまってくださるとは、なんと感謝なことでしょう。（外處トミ）

神様は　試練とともに　乗り越える
術をも教え　我を助ける

2021年10月31日

もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ1:8-9）
　自分の罪、弱さから目をそむけず、向き合い、神様に求めれば、神様はいつでも助けてくださることに感謝します。（外處光歩）

もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」（Ⅰヨハネ1:7）
　神様の御声に聞き従い、神様との交わりのうちに歩んでいけたら幸いです。（外處結実）

群馬県吉井町の里山風景

もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。」（Ⅰヨハネ1:6）
　「神は愛です。愛のうちにとどまる人は神のうちにとどまり、神もその人のうちにとどまっています。」（Ⅰヨハネ4:16）
　私は神様から目を離し、闇の中を歩んでいないだろうか。神様の愛のうちにとどまっているだろうか。今までの多くの聖書の学びを通して、また数えきれない試練による導きを通して自分が神様によって導かれていることを確信しています。
　しかし、全き救いの確信があってどんなことが自分に起ころうとも喜んでいられる自信はありません。
　尾山令仁さんはいつもルンルンしているとのことです。奥様が召されても、御子息の片手片足が動かなくなっても変わらずに喜びで満たされているとのことです。死ねば天国にいけるから死も全く恐れることは無いと明言しておられます。
　自分にもその全き救いの確認があれば、今のような不安神経症とも診断されるような人生ではなく、いつもルンルンしていられるのにと思ってしまいます。
　パウロは主に出会う前、クリスチャンを捕えようとして歩いていたところに、主が突然現れて奇跡の御業によって完全なる改心をさせて主の働き人とされました。
　求めていない人が、尋常ではない全き救いの確認と証の力を一方的に与えられたのです。一方、私は以前から求め続けておりますが、まだ与えられていません。このことから、全き確信と証の力

としての御霊は、神様が主を証しするに相応しい人に御心にかなう時に、主権を持って与えられるものと理解しました。

こんな私なので、いつ与えていただけるのかわかりませんが、ただ死ぬのは神様がパラダイスに来ても良いという合格印が無いと行けませんので、私はまだまだこの世で矯正される必要がありそうです。いつもルンルンできるその時まで、神様を待ち望みたいと思います。（外處徳昭）

私たちがキリストから聞き、あなたがたに伝える使信は、神は光であり、神には闇が全くないということです。6 もし私たちが、神と交わりがあると言いながら、闇の中を歩んでいるなら、私たちは偽りを言っているのであり、真理を行っていません。7 もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。
8 もし自分には罪がないと言うなら、私たちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。10 もし罪を犯したことがないと言うなら、私たちは神を偽り者とすることになり、私たちのうちに神のことばはありません。」（Ⅰヨハネ1:5-9）

交わり（㊥コイノーニア、㊇ fellowship）とは、もともと財産を共有する者同士に用いられる言葉ですが、ここでは命の共有を意味します。それはまず神との交わりにおいてなされます。永遠なる存在者である神は本来超越の神ですが、御子キリストを通して、私たちとの人格的な交わりを開かれました。その神との垂直的な交わりを軸にして〈私たちの交わり〉が生れ、命を共有します。
ヨハネはここで、神との交わりに必要な条件について、私たちに教え始めます。

「人が神との交わりを持つためには、罪を隠すようなことがあってはならない」と続きます。部屋の中に、光と闇が同時に存在することがないのと同様に、人の人生にも、それらが同時に存在することはありません。

もしある人が「闇の中を歩んでいる」のなら、その人は神との交わりのうちにはいません。「神と交わりがあると言っていながら」、いつも、習慣的に「闇の中を歩んでいるなら」、その人はまだ救われていないのです。

しかし、「もし光の中を歩んでいるなら」、その人は主イエスとの「交わり」、および他のキリスト者たちとの「交わり」を持つことができます。

この個所のヨハネの意見では、人は光の中か闇の中のどちらかにいます。もし人が光の中にいるなら、その人は神の家族の一員です。もし人が闇の中にいるなら、その人が神と共有するものは何もありません。神のうちには暗いところが少しもないからです。

光の中を歩む人たちであるキリスト者たちは、「互いに交わりを」保ちます。そして、「御子イエスの血はすべての罪から」絶えず彼らをきよめます。神の赦しはすべて、カルバリで流された御子の血に基づいています。その「血」によって備えられた義なる土台に基づいて、神は様々な罪を赦すことがおできになります。

また、神と交わるためには、私たちが自分に関する「真理」を認めることが必要になります。例えば自分に罪深い性質があることを否定することは、自分を欺くことであり、事実に反することです。ヨハネが、8節の「罪」（単数形）と9節の罪（複数形）を区別していることに注目すべきです。

単数形の罪（sin）は、私たちの堕落した邪悪な性質のことを言っています。複数形の罪（sins）は、私たちがすでに働いた悪事のことを言っています。私たちの実際の姿は、私たちが今までしてきたことよりもはるかに悪いのです。しかし、主はほむべきかな。主は、私たちの罪の性質と、私たちが実際に犯した様々な罪のために死んでくださったのです。

回心することによって、罪の性質が根絶されるわけではありませんが、回心することによって、新しい性質、神の性質が植え付けられるのであり、内住する罪に打ち勝つ力も与えられるのです。

神との交わり、および他のキリスト者たちとの交わりのうちに日々歩むために、私たちは「自分の罪を言い表」さなければなりません。犯してしまった罪、怠慢の罪、思いにおける罪、すでに人に知られている罪を告白しなければなりません。これらの罪を神の御前にさらけ出し、それらの罪名を告げ、神の側に立ってそれらの罪に反対し、それらの罪を捨てなければなりません。真の告白には、罪を捨て去ることが含まれます。

そうする時、私たちは、「神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し……てくださいます」という約束を受けることができるのです。

神は、「赦しを約束しておられ、その約束を守ってくださる」という意味において、真実なお方です。神は、「正しい方で……罪を赦し」てくださいます。神は、主イエスの十字架のみわざのうちに、赦しのための義なる土台を見いだされたからです。

ヨハネがここで語っている赦しは、親としてのものであって、裁判官としてのものではありません。裁判上の赦しとは、罪に対する刑罰からの赦しを意味します。これは、罪人が主イエス・キリストを信じた時に得るものです。これが裁判上のものと呼ばれるのは、神が、さばき主として、お与えになるものだからです。しかし、人が回心したあとで犯す罪は、どうなるのでしょうか。その刑罰に関するかぎり、その代価は、カルバリの十字架の上で、主イエスによってすでに支払われています。何と感謝なことでしょう。

しかし、神の家族における交わりに関する限り、罪を犯している聖徒には、親としての赦し、つまり御父の赦しが必要なのです。聖徒は、自分の罪を告白することによって、その赦しを得ます。

私たちが裁判上の赦しを必要とするのは、ただ1度だけです。それが、私たちのすべての罪ー過去、現在、そして将来の罪ーに対する刑罰の問題を解決します。しかし、私たちには、親としての神の赦しが、信仰生活を通して必要なのです。

「自分の罪を言い表す」とき、私たちは、神が私たちを赦してくださることを、神のみことばを拠り所として信じなければなりません。そして、もし神が私たちを赦してくださるなら、私たちも「自分」を喜んで赦さなければなりません。

最後に、神との交わりのうちにいるために、私たちは、自分が罪の行いをしてしまったことを否定してはなりません。神は、すべての人が罪を犯したことを、ご自分のみことばの中で繰り返し述べておられます。これを否定することは、「神を偽り者とする」ことです。それは神のみことばを真っ向から否認し、主イエスが、苦しみ、血を流し、死ぬために来られた理由を完全に否定することになります。

ああ、何と感謝なことでしょう。私たちは子として御父の赦しを受け、愛の交わりの中にいつまでもとどまり続けることが出来るのです。ハレルーヤ！（福島勲）

貴重なご感想をありがとうございました。
次回はマナ11月号の感想を12月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。（永井）